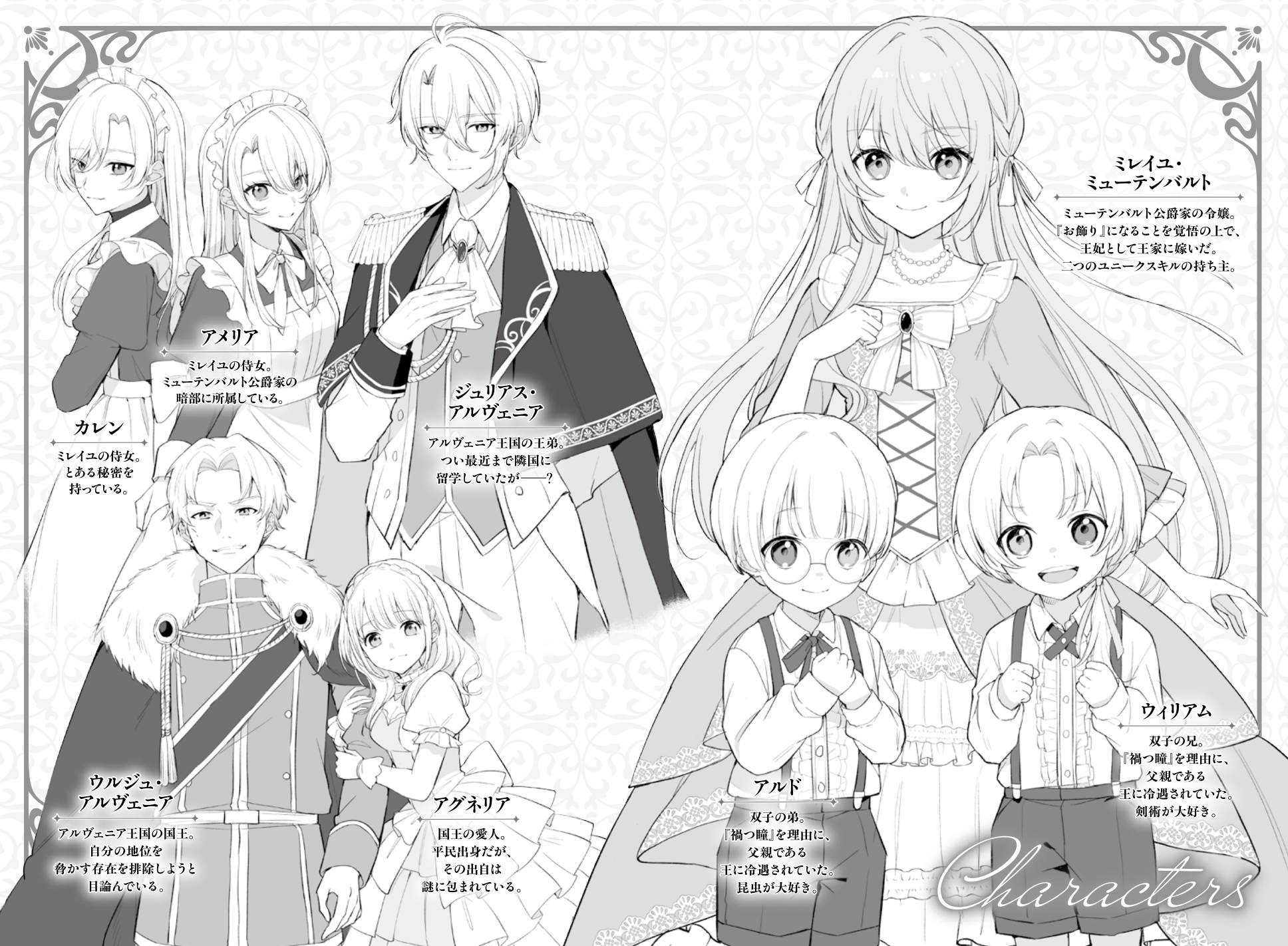
継母王妃は双子王子を愛でていたい


ミレイユ・
ミューテンバルト
ミューテンバルト公爵家の令嬢。
『お飾り』になることを覚悟の上で、
王妃として王家に嫁いだ。
二つのユニークスキルの持ち主。
アメリア
ミレイユの侍女。
ミューテンバルト公爵家の
暗部に所属している。
カレン
ミレイユの侍女。
とある秘密を
持っている。
ジュリアス・
アルヴェニア
アルヴェニア王国の王弟。
つい最近まで隣国に
留学していたが――?
ウィリアム
双子の兄。
『禍つ瞳』を理由に、
父親である
王に冷遇されていた。
剣術が大好き。
アルド
双子の弟。
『禍つ瞳』を理由に、
父親である
王に冷遇されていた。
昆虫が大好き。
ウルジュ・
アルヴェニア
アルヴェニア王国の国王。
自分の地位を
脅かす存在を排除しようと
目論んでいる。
アグネリア
国王の愛人。
平民出身だが、
その出自は
謎に包まれている。
Characters

継母王妃は双子王子を愛でていたい

一章

「余が愛しているのは、アグネリアだ。お前ではない。それを、努努忘れぬよう」

この、アルヴェニア王国の国王陛下を前にして、私は形ばかりの礼をとる。

陛下は、その地位が安泰であると信じ込んで、臣下は自分を裏切ることは無いと過信している。

だけど、執政を疎かにして、後宮に籠るばかりの君主に誰が心からの忠誠を誓うというのだろう。

「ミューテンバルトの権威が、この後宮でも通用するとは思うな。この後宮に入った以上、お前も我が手駒のひとつ。手駒は手駒らしく、余の言うことをよく聞くように」

「……承知いたしました」

形ばかりの言葉を口にのせ、私は頭を下げた体制のまま、陛下に答える。

今はまだ、その時ではない。

本日、私――ミレイユ・ミューテンバルトは生家のミューテンバルト公爵家を出て、王妃としてこの王家に嫁いだ。

このアルヴェニア王国の国王陛下――ウルジュ・アルヴェニアに。

陛下は、今年で御歳四十六を迎えられる。十六歳の私とは、三十個差の年齢だけれど、政略結婚のほとんどはこんなものだ。不服に思うことはなかった。

これが、ミューテンバルト公爵家に生まれた私の役目だから。

今、この国は、権力が二分している。その結果、貴族達は二つの派閥にわかれていた。

一方は国王派。そしてもう一方は、私の生家でもあるミューテンバルト公爵家派だ。

（昔、お父様は王弟殿下を次代の王として担ぎ上げようとしていた）

だけどその王弟殿下は突然、隣国に留学に出てしまった。留学の目的どころか、その期間さえも明かされず……ミューテンバルトは突然梯子を離されたようなものだ。

旗頭を失ったことで権力争いはさらに激化し始め、国王派による悪政はとどまるところを知らない。それを収めるために、お父様は私を王家に嫁がせることを決めたのだ。

お父様は私を使って国王派をも取り込もうという魂胆なのだと思う。王を廃することができないのなら、利用するというふうに指針を変えたのだ。

それに、万が一私と王との間に子が生まれれば、お父様は縁戚として政務に携わることができる。

愛人を沢山囲っているとはいえ、この国の王位継承権は生まれた順ではない。王妃の子こそが継承権第一位となるのだ。

子ができなかったとしても、王妃として次期王の指名に関わることができる。

（ミューテンバルトに生まれたのですもの）

政略結婚は当然。愛のない結婚など、幼いころから覚悟している。
私は、私に託された責務を果たすだけ。
（とはいえ、そう上手くいかないことは分かっている）
陛下と私の父、ミューテンバルト公爵は政敵。陛下は父を煙たがっており、父は厳しく陛下の言動を見ている。
つまり、陛下にとって私は憎き政敵の娘なわけで。
待遇は悪いでしょうね、とは思っていた。
だけど――

☆

「後宮の、離れ……」
結婚の儀が終わり、国民へのパレードも終わった。
後は、国王夫妻の部屋に向かうとなった時、私は陛下に玉座の間に呼び出されたのだ。
そして告げられたのが、「私はお前を愛していない」という発言だった。
それはまあ、私としては願ったり叶ったりというものだ。私とて陛下の寵を求めて嫁いだわけではない。初夜をこなしたあとは、ひとまず国王派を取り込むために動こうと思っていた。

だけど――
「まったく、許せませんわ……!!」
ミューテンバルトの家から随従してきた侍女のひとり――アメリアが拳を握りしめて震え出した。
その横ではもうひとりの侍女――カレンも無言で頷いている。
二人は幼い頃に私が拾った子達で、私のことをとても慕ってくれている。主従関係ではあるけれど、気安く話せる貴重な存在だ。
今、私たちは後宮の離れにある建物――離宮の前にいた。
私たちが足を止めたのは理由があった。それは、あまりにも離宮がボロ……歴史を感じさせる建物だったからだ。どう見ても、長く放置されてきた建物である。
これだけで、陛下が私をどう扱うつもりかが見て取れるというものだ。
私は離宮の入り口である鉄の扉の四方を囲むように伸びる蔓を見ながら、その扉を軽く叩く。丈夫そうなので、安全面では心配はなさそうだ。
それにしても、仮にも王妃となった私に護衛騎士すらつけない、とは。
私など不審者にでも襲われてしまえ、ということかしら？
（いえ、刺客を放って暗殺するつもりかしらね）
「アメリア、カレン」
「はい」



「あなたたち二人では、わたくしの護衛は厳しいかしら」
ふたりの返答は、予想していた。
私の考えるとおり、彼らは揃って首を横に振る。
「問題ありませんわ。私とカレンは、武術に長けています。ミレイユ様もご存知かと思いますが……ミューテンバルトの邸でももっとも腕がたつ侍女は私たちですわ。私とカレンのふたりで必ずやミレイユ様の御身をお守りいたします」
「ありがとう、頼りにしてるわ」
元々、アメリアとカレンはミューテンバルトの暗部に所属していた。
だけど、お父様が私を陛下に嫁がせると決めた時、二人が望んでくれたこともあり、私の侍女へと配置換えになったのだ。私の身の安全のために。
「私も、護身術であれば多少は備えています。では、安全面の問題はひとまず大丈夫そうね」
「ですが……！　これはあんまりですよ！　信じられません、これは閣下にお伝えして、抗議すべきことですわ！」
「アメリアの言う通りです。ミレイユ様はこんなあばら家に住んでいいご身分ではありません」
（あ、あばら家……）
はっきり言うカレンに私は苦笑する。
確かに風情を感じる……もとい、ボロい建物ではあるけれども。手入れさえすれば、気にならな

いはずだ。それなりに広いようだし。
私はふたたび扉をカツカツと指の背で叩いた。
鉄の扉は、中の声も防いでくれそうだ。雨風からも守ってくれそう。
「構わないわ。むしろ、こちらの方が都合がいい」
「都合が……ですか？」
尋ねるアメリアに、私は笑みを見せた。
「ええ。陛下と同じ部屋なんて、そちらの方がよほど息が詰まるわ。それに、陛下の私室には愛人が常に侍っているという噂だもの。さすがに、ねぇ」
陛下と愛人がいつもどのように過ごしているかなんて、想像しなくても分かるというものだ。
お父様からも聞いていることだし。
「陛下はわたくしに仰ったわ。わたくしは形ばかりの王妃。王妃としての勤めは、陛下の不興を買わないこと。陛下は、わたくしに関与しないと仰せよ」
それつまり――今宵の初夜すらも、果たされないことを意味している。
ひとりの娘としてそれを喜べばいいのか、ひとりの貴族の子女として不満を覚えればいいのか、悩んだけれど軍配は前者に上がった。
好き好んであの男と真実の夫婦になりたいとは思えなかった。
「さて、わたくしはわたくしの、仕事をするといたしましょう」

陛下の御代は、直に終わりを向かえるだろう。
政務も果たさず、権力を好む臣下の言いなりになったあの人には、既に国の王たる資格がないと……ほとんどの貴族は思っている。
それは国王派の貴族達も同じで、彼等は陛下に忠誠を誓っているのではなく、ただ甘い汁を吸える方へとすり寄っているだけ。王妃である私に……ミューテンバルトに鞍替えした方がいいと分かれば、国王派の派閥などすぐに瓦解するだろう。
だから、私は王妃として動く必要があるのだけど、それだけでなく……
（陛下のもっともお気に入りの愛人……アグネリアは平民の出だと言われているけれど。その裏付けは取れていない。彼女に問題があれば、それは国王の急所となるかもしれない）
陛下は何十人もの愛人を抱えている。
その中で特に寵愛されているのがアグネリアだ。
突然彗星のように現れて、陛下の心を射止めた、謎の女。
その素性が気になるのは、誰しも同じ。でも、その出自は曖昧で、ミューテンバルトが探ってもその違和感をぬぐうことはできなかった。
だからこそ直接見極める必要があるとお父さまは判断したのだけど、男は後宮には出入りできないので、私が向かうよう命じられたのだ。
私のユニークスキルが役に立つだろうと。

「アグネリアはなかなか陛下の私室から出てくることがないようだけど、王家の晩餐会には出席するはずよ。そこでまずは接触するわ」

王家の晩餐会には常にアグネリアも帯同すると聞いている。愛人とは思えない待遇だ。

私は鉄の扉を開いて、離宮の中に足を踏み入れた。

「ゲホッ……」

思った以上に中は埃っぽい。

それに、離宮には鍵すらついていなかった。錠は壊され、鉄の扉にぶら下がっているだけだ。

衛生面は最悪、防犯面も期待できない。もはや廃墟である。

咳き込んで、陛下を恨んだ。

(掃除くらい手配しておきなさいよ……!!)

長い間、換気がされていなかったのだろう。

中はむっと饐えた匂いがする。空気が澱んでいる。カビ臭い気もして、鳥肌が立った。

しかも、過去に火災でも起きたのか壁の至る所に煤けた跡がある。

曰く付きで廃墟になったと説明されても、納得がいくほどである。

(事故物件じゃないでしょうね……)

幽霊が出たらどうしたら。信じていない質とはいえ、ここまでおどろおどろしいと、思わず疑ってしまう。

何もかもが最悪の環境に、カレンが前に進み出た。

「ミレイユ様！　私どもが掃除いたします。中に入られるのはそれからに――」

カレンが動いたことで埃が舞い上がったのか、涙が滲む。

変な虫とかいたらどうしよう。幽霊よりそっちの方がよっぽど危機的だ。

ノミとかシラミとかダニとか。殺虫剤を用意すべきだったかしら……？

何度も咳き込んだ後、カレンに頷いて答えようとしたその時、事態は動いた。

奥の方から物音がしたのだ。

サァ、と青ざめた。事故物件……ではない、はず。

脳裏に、最近読んだ怪奇小説の内容がよぎる。

実は、館に住み着いた悪魔は、二重人格の主人公だった、というオチだ。

(いえ、ここは一応管理が厳しい王城の敷地内。部外者は立ち入れないはずよ)

それなら、獣だろうか。

「見てまいります」

すぐにアメリアが私の前に出る。

パッと見は分からないけれど、メイド服の中には、いくつもの暗器が備えられている、らしい。

彼女は隙のない構えで奥を警戒していたけれど、やがて困惑したように首を傾げた。

「どうかしたの？」

「いえ……それが」
アメリアの言葉の先は、続かなかった。
なぜなら、奥からなにか――ちいさなものが飛び出してきたからだ。
「っ!?」
驚いて目を瞬くと同時、アメリアが僅かに目を開いて、何かを掴む。
そのまま、彼女はぐるんとそれを持ち上げて、腕に持った。
それ、は――
「子供……？」
ちいさな、男の子だった。
見事な金髪に、特徴的な瞳。左右で、瞳の色が違う――オッドアイ。
肩より長い髪は、自分で切りそろえようとしたのか、長さがバラバラだ。
（この子は誰!?　それにこのオッドアイは……）
「くっ、はなせ！　はな……はなしてえっ!!」
アメリアに後ろから抱き上げられながら、男の子は足をジタバタと振り回した。
「はなしてったら!!」
そこで、男の子の体がぐるりと上下に回転した。
足蹴りされそうになったアメリアがサッとそれを避けたその直後、奥からまたひとり、ちいさな男の子が飛び出してくる。
「はなして……っ!!」
奥にもうひとり隠れていたことにアメリアは気がついていたようだけれど、このタイミングで飛び出してきたのは予想外だったのだろう。
そのちいさな子供は、アメリアの腰にガシッ！　と掴むと泣きながら叫んだ。
「ウィルをはなして!!」
そう言いながらもその子は、ひたすらアメリアに抱きつくだけだ。アメリアに未だ捕まったままの子供は、なんとか彼女の手から離れようと身を捩っている。
「と言われましても。どうされますか？　ミレイユ様」
「離してあげて。……きみたち、どうしてここにいるの？」
そう命じると、アメリアはすぐに腕に抱いていた子を下ろした。
同時に、もう一人の子もアメリアから離れ、二人はひしっとお互いの体を寄せる。
私は膝を折って、彼らと目を合わせた後、そっと尋ねた。
びくりと泣いていた子が震える。答えたのは、アメリアに捕まっていた方の子供だ。
「ぼくは……ぼくたちは、へいかのこなんだ!!　ぼくたちにがいをなすことは、はんぎゃくざいなんだ！」
まるで、それをお守りにするかのように、願うように、切実な声でその子は言った。

「陛下の――？」
陛下に、お子がいるなんて聞いたことがない。
唖然とする私に続いて、アメリアとカレンが膝をついて尋ねる。
「陛下のお子、ですか。お名前は？」
尋ねられると、二人は戸惑うように顔を見合せた。
だけどすぐに答えがある。
「ウィリアム」
答えてくれたのはやはり、アメリアに捕まえられていた方の子。ウィルというのは愛称だったらしい。前髪をおでこの中央で分けていて、色違いの瞳がよく見える。
もうひとりの子は、大人しい性格なのだろう。ウィリアムの隣に隠れるようにして、おずおずと答えた。ウィリアムと同じく金の髪を持っているが、長い前髪で隠れてその瞳は見えない。
「アルド……」
「ウィリアム王子に、アルド王子ですね。お初にお目にかかります。ご挨拶が遅れ申し訳ございません――」
私の言葉に、アメリアとカレンが揃って私を見る。
陛下に子がいるなんて聞いたことがない。素性を検めるべきだ、という目だ。
だけど私はそれに構わず、幼い王子たちに尋ねた。

「王子殿下がたはなぜ、こちらに？」
「……」
王子たちが顔を見合わせる。
不安そうに、アルド王子が、ウィリアム王子の服の袖を掴む。
よく見れば、その服もくたびれていて、あちこちにほつれが見える。袖口なんかは、なにかに引っかけてしまったのか、破れていた。とても、王子の姿には見えない。
「ぼくたちは……へいかにきらわれているから」
幼い子供らしく、その話し方はたどたどしい。だけど話す言葉は妙に大人びていた。
それが、彼らが背伸びしなければ生活もままならなかっただろうことを思わせて、胸に鋭い痛みが走った。痛み、というよりも――強烈な不愉快さ。
（これ、虐待じゃないの？　ネグレクトって言うんじゃなかったかしら!?）
不快感、疑心、そして、怒り。こんなにちいさな子供が、懸命に大人の振りをしようとしている。
そういえば、さっき私たちに言った第一声は――
『ぼくは……ぼくたちは、へいかのこなんだ!!　ぼくたちにがいをなすことははんぎゃくざいなんだ！』
だった。それは、必死の言葉だったのだろう。そう言えば、相手が引いてくれるかもしれないと。
少なくとも、そう信じての言葉だったのだ。お守りのようだと思ったけれど、その実、本当に彼

らにとっては身を守る唯一の言葉だったに違いない。
彼らがもし、本当に陛下の子供だと言うのなら、その面倒を見ずにいるあの男のことが、私は許せない。ネグレクト、放置子、児相――様々な単語が思い浮かんだところで、私は息を呑んだ。
（ネグレクト？　放置子？）
児相？　って、何だったかしら……
戸惑いは一瞬で溶けた。すぐに思い出したからだ。
ここは違う世界のことを、日常のことを、生活のことを。
「――」
子供は、誰しも大人の保護下にあって衣食住を保証されるべきだ。勉学に励む義務があり、その資格がある。
（そうだ……そうだった）
私には、前世の記憶がある。
「ミレイユ様？」
戸惑った声に呼ばれ、ハッと我に返った。
朧気な記憶は、霧散し、手繰り寄せるには時間がかかる。
だけど、この短い時間の中でも知ったことがあった。
それは、この子達をこのままにはしておけない、という感情だった。

「初めまして、私はミレイユ。今日からここでお世話になります」
しゃがんで、視線を合わせて自己紹介をするも、双子の緊張はほどけない。
（うーん……どうしたらいいのかしら……）
子供たちとあまり触れ合った経験がない私は完全に困惑していた。
私は末っ子で、下に妹や弟もいない。
お兄様に子はいないので、姪っ子や甥っ子もいないのだ。
つまり、圧倒的な経験不足……！　どうしたものかしら。
とりあえず、対話よ、対話。私は自己紹介――自己ＰＲに励むことにした。とはいっても、就活や転職といった面接向けのものではない。
女児の気持ちに戻って、私はあの頃。
前世、彼らと同い年くらいの時、何をしていたか思い出すことにした。
それは――そう！　プロフ帳！
【私の名前は●●！　●●月●●日生まれだよ！　●●座の●●型で。趣味は●●！】と書かれていた文面を思い出す。趣味？　趣味……何かしら。手芸？　ううん、それは淑女のたしなみだもの。
ええと――あ。
「私の名前はミレイユ。十六歳で、お花を見るのが好きです。物語を楽しむのも好き。性格は、明るい方だと思います。楽しそう、ってよく言われるの。……あなたたちはどうかしら？　何歳で

すか」
　すると、おずおずと、アルド、と呼ばれていた方の王子が指を四本立てて見せる。
「四歳ですね。ちなみに、このひとは二十二歳。このひともそうです」
　私が振り返ってアメリアとカレンを見ると、ふたりは交互に頷いた。
　また、双子に視線を戻す。
「ふたりは、何が好きですか？」
　次は趣味だ。まずは、対話を重ねて、緊張をほぐすのが目的だった。
　ありがとう、前世活用したプロフ帳……！
　あれがあったから友達作りが楽しかった。転生してもなお、助けられているわ！
　私が水を向けると、双子はそれぞれポツリポツリと話し出した。
「きとか……おはな……」
　そう答えたのは、アルド王子の方。
　ウィリアム王子の方もおずおずと答える。
「ぼくは……けん……」
「木やお花が好きなのですね。今の季節だと、チューリップやフリージア、ヒヤシンスなどが見頃ですね。後で一緒に見にいきませんか？」
　提案すると、アルド王子がパッと顔を輝かせる。だけどすぐに困ったように眉尻を下げてウィリアム王子を見るので、私は続けてウィリアム王子に声をかけた。
「剣が好きなら、彼女に教えてもらうのはどうでしょう？　カレンはこう見えて腕が立つんです」
　ちら、と背後を振り返ると、意を得たり、というようにカレンが頷いてくれた。
　それに微笑んで、それから今度は侍女のふたりに趣味を聞く。そういえば、ふたりの趣味をこうして聞いたことはあまりなかったかもしれない。
　いけないわね。主人として、部下の趣味嗜好は把握しておかないと。
「ふたりは何が好き？」
　先に答えたのは、姉のアメリアだ。
「私はミレイユ様が好きです」
「趣味よ？」
「私の趣味はミレイユ様をお守りすることです」
「私も同じです」
「うーん……」
　ふたりは、私が訳あって拾った子なのだけど、育て方を間違えたかしら……
　首をひねっていると、私の困惑を察したアメリアが別の回答を口にした。
「それ以外で、となると、料理が趣味です。ご飯を作ることが好きです」
　双子向けに言葉を言い換えてくれたのであろうアメリアに私は目を瞬いた。

料理が好きだなんてしらなかったわ。
アメリアの回答に、双子の目が輝いた。
「りょうり！」
次いで、カレンが口を開く。
「姉同様に、それ以外で、となりますと……私は鍛錬ですね。剣をふるうのが好きです」
同じように、カレンが双子向けに言い直してくれる。
それに反応したのはウィリアム王子だった。
「けん……！」
「まずは、おうちの中に入れてくれないかしら。ここはちょっと、冷えるの。だめかな？」
実を言うとそんなに寒くはない。春先と言ってもちゃんと着込んでいるもの。
正直に奥に行ってもいい？　と聞いてもよかったのだけど、双子はまだ私たちに気を許していないものか困惑している。
だから『寒くて可哀想だ』という彼らの良心――というとちょっと悪どいかしら？
まだ判断に迷っている様子の彼らの背を押すつもりで便宜上の嘘を口にする。
双子はハッとしたようにこくこくと頷いた。
「ど、どうぞ！」
双子は慌てて手を振って室内を示した。これだけで、優しい子たちだとわかる。

「……」
「カレン？」
ふと、背後を気にしている様子のカレンに声をかけると彼女はハッとしたようにこちらを見た。
「いえ。気のせいだったようです」
「そう……。それじゃあ、入りましょうか」

☆

そうして、私たちは奥へと案内してもらった。
彼等は王城の敷地内を転々として過ごしているようで、この離宮にもよく忍び込んでいるそうだ。
「そこはね、ガタガタするんだよ」と教えてくれる姿が可愛らしい。
予想はしていたけれど、中も相当にボロい。家具は全部入れ替えて、壁紙は張り替えよう。
いろいろ手を回すべきことはあるけれど――
「入浴、ね」
まずはお風呂である。お風呂は大切だ。温かいお湯は心も体も健やかにしてくれるもの。
私は、双子を見て言った。
「それじゃあ、行きましょうか！」

「んん……？」
不思議そうにしているふたりを連れて浴室に向かう。
本来なら、この歳の子供は使用人に手伝ってもらうものだけど、彼等の状況から見るに、常に面倒を見てくれている大人はいないみたいだ。
今後、ひとりで入る可能性を考えると、どの色が何のボトルか、ふたりに教えておく必要がある。
そして、足を踏み入れた浴室。
「……」
思わず怯みかけた足を、前に出す。
（想像はしていたけども……！　ここも相当ぼろいわ！）
壁は変色してコケが顔を出している。今にも風に吹かれて壁紙が飛んでいきそうな有様である。
あばら家、という言葉が頭に浮かんで、私はそれを振り払った。
（やっぱり、早急に改装工事が必要ね）
これ、雨漏りもしてるでしょ。絶対。だからコケの群生地となっているのだ。
衛生的にも非常に不安である。とはいえ、今はそうもいっていられない。
とにかく急いで、職人を手配しましょう……
そう思いながら、私はミューテンバルトの邸から持ち込んだ三つのボトルを双子に見せた。
「見てください、これはボディーソープ。こちらはシャンプー、そしてこれはヘアオイルです」

「ボディー……？」
アルド王子が瞳を揺らし、困惑したように言った。
私は屈んで膝をつくと、ボトルの蓋を開けて見せる。
「これで体を洗うんですよ。良い匂いでしょう？」
ボディーソープは私の好みでラベンダーの香りがする。
柔らかで落ち着いた香りにふたりは興味津々になったようだ。
「わぁ……!!　いいにおい！」
「すごぉい！　おはな、つめてるの？」
純粋な顔で尋ねてくるアルド王子に私は悪戯（いたずら）っぽく笑う。
「さあ。どうでしょうね？　使ってみたら分かるかもしれません」
そして、背後のカレンをちらりと見る。
彼女は意を得たりというように頷いて、腕まくりして見せる。
「それじゃあ、王子殿下。お風呂に入りましょう」
「あ、待って！　カレン。せっかくなら、これ」
双子を怖がらせないようにと、そっとついてきていたアメリアがそう言って、ポケットから何かを取り出した。それは――
「ハンカチ？」

目を瞬く私に、アメリアが照れたように笑う。
「私、昔これで遊ぶのが好きだったんです。湯にこれを浸すと、クラゲのように膨らむんですよ」
くすぐったそうに言う彼女に、私は衝撃を受けていた。
なぜなら、私も前世でよくやった遊びだからだ。今世では、厳しくしつけられたのでそうした手遊びはできなかったけれど。
（確かに私もやった！　やったわ!!　前世の話だけど！　楽しいわよね！）
それなら、アヒルの置物とかも用意した方がいいのかしら。
いえ、そうしたらなかなかお風呂からあがらなくなる……？
湯あたりしてもいけないし、それは夏の水遊びの時の楽しみにしてもいいかもしれない……
カレンは、アメリアの言葉に驚いたように目を見開き、それから微笑む。カレンが笑うのは珍しい。懐かしい思い出に表情が和らいだようだった。
「じゃあ、借りるね」
アメリアからハンカチを受け取ると、カレンは双子を連れて浴室に入っていった。
（お風呂あがりに冷たい飲み物でも用意しておこうかしら）
銭湯や温泉なら、入浴後はよく冷えた牛乳（またはビール）と相場は決まっている。
双子は、牛乳を飲めるかしら……？
そんなことを考えながらアメリアと共にサロンに戻り、ガタつくテーブル応急処置を施す。テーブルの足にそれっぽい木の板を嵌め込んで高さを揃えれば、応急処置完了だ。
ひとまずガタつかなくなったテーブルに、アメリアがティーセットを並べていった。
必要な家具類を手配して、壁の張替えのための職人も寄越してもらうように実家に依頼するつもりとはいえ。すぐにはどうしようもないので、数日はこの生活が続くだろう。
ため息を吐いて、背もたれに背を預けたが、不穏な音がして背筋を伸ばさざるを得ない。
まったく、この屋敷では休まることもできないのか。
「王子殿下たちは紅茶を好むでしょうか？　お砂糖をたっぷり入れたホットミルクの方がよろしいですかね」
アメリアの言葉に私は先ほどの考えを口にした。
「お風呂あがりだし、冷たい牛乳の方がいいかもしれないわ」
「そうですね。きっと疲れててくるでしょうし、そうしましょうか」
はにかんで答えてから、アメリアはすっと表情を消した。
真剣な声で、彼女は囁くように言う。
「今のうちに、調べてまいりましょうか？」
その言葉を受けて、私はアメリアに王子達の素性を探るよう命じた。一時間もあれば、情報が手元に集まるはずだ。我がミューテンバルト公爵家の人間は優秀だもの。
……そもそも彼等が本当に王の子なのか、王の子ならば、なぜその存在が隠されているのか、調

べることも考えないといけないこともたくさんある。
『王妃』として、私がどうするのかも。
だけどその前に今は――
「ひとまず、ご飯、よね」
（あの年頃の子は、何が好きなのかしら）
そう思いを馳せそうになったところで、浴室の扉が開いた音がした。
この建物は古いので、物音がよく響く。ミューテンバルトの邸では考えられないことだ。
こんなところでシェアハウスなんてしたら、苦情が殺到することだろう。それでも、一般庶民だった前世の記憶を思い出した私にとっては、懐かしい生活音のようで安心感もある。
浴室に続く扉から現れたのはカレンだ。
「入浴が終わりました」
続いて、ウィリアム王子とアルド王子も姿を見せる。金色の髪もすっかり綺麗になっている。
カレンとアメリアの私物なのか、二人にはサイズの大きい服を身に纏いながら歩く姿が可愛らしくてクスクス笑っていると、ハッとしたようにウィリアム王子がこちらを見た。
それから突然、自信をなくしたようにおずおずと申し出た。
「あの……」
「何ですか？」

「ぼくたち……その……えっと」
しかし、その先はなかなか言葉にならないようだった。アルド王子も、緊張したように私を見つめているのがわかる。
どうやら、このふたりはなにか言いたいことがあるようだけど、上手く言葉にならないようだ。
少し考えた私はカレンに耳打ちすると、とあるものを持ってくるように指示する。
そして、ふたりを招き寄せた。
「どうぞ、こちらに」
手招きすると、ふたりは困惑したようにしながらも、こちらにゆっくりとやってくる。
まずは、最初に私の傍にやってきたウィリアム王子を隣に座らせる。その次に、アルド王子がおずおずとこちらにやってきた。アルド王子も座らせて、私はその小さな頭に触れた。
黄金の髪をすいてやると、先程入浴したためか、さらさらと指の間からこぼれていった。
「なあに？」
戸惑う小さな王子を安心させるように、私はさらに頭を撫でた。
ちょうどその時、カレンが目当てのものを手に戻ってきた。
それは――一本の鋏（ハサミ）。
それを受け取って、私はアルド王子に話しかける。できるだけ、ゆっくりとした声で。
「あのね、今のままだと目が悪くなってしまうわ」

「め……？」
不思議そうにするアルド王子に、私は自身の前髪に触れた。
そして、自分の前髪を引っ張って、目元まで伸ばす。
「髪が目の中に入ったら、痛いでしょ？　傷ついてしまうわ」
「……でも」
「怖い？」
私はアルド王子に視線を合わせて、王子の顔を見る。アルド王子は何か言い淀んでいるようで躊躇っていたけれど、ゆっくりと話し出す。
「みえるの……こわい」
「――」
その一言で、この子が今まで何を見てきたのか。何を見て、何を思ったのかを、その一片を知った気がした。
きっと、何を言っても、この子の恐怖はすぐにはなくならない。
だって、それは今始まったものではないのだろうから。
きっと、数年をかけて積み上げられたもの。それを、言葉で消すことは難しい。
だから、私はウィリアム王子の頭をなでながら、彼に言った。
「でもね。外の世界は広いわ」

「でも……めは、みせちゃいけない、って、ウィルが……」
その言葉を受けてウィリアム王子も思い出したのだろう。
自分たちがオッドアイ――この国では【禍つ瞳】として虐げられている瞳を持つのだと。
ウィリアム王子の顔色が陰る前に、私はハッキリと言った。
「そんなの、忘れてしまいなさい。これからは、わたくしがいるのだから」
「ミレイユが……？」
困惑したように、ふたりの幼い少年は首を傾げる。
それに、やはり私はきっぱりと答えた。
「ええ！　もし、これから、瞳を理由に難癖――悪く言う人がいるのなら、私が成敗してさしあげます。そのひとはきっと、あなたたちの瞳があまりに綺麗で、嫉妬しているだけなのよ」
「しっと？」
「いいなぁ、って思っているの。あんまりに綺麗だから」
そう言うと、アルド王子は不安そうに私を見上げた。
信じていいのか、迷っているような素振り。
「安心なさい。わたくしが――。これからはわたくしが、あなたたちを守ってあげる」
この子達を守りたいと、そう思った。
だって、こんなにも素直で、可愛くて、愛おしい。

そのためには、何でもするわ。覚悟はもう、できているもの。
「だからどうか、瞳を見せて？」
「――……」
おずおずと、アルド王子が頷いた。
私は彼が許してくれたと見て、そっと彼の前髪を横に流す。サラサラで、指通りがいい。これに鋏を入れてしまうのは少し惜しいかもしれない。
（ああ、やっぱり）
長い前髪の奥には、綺麗な瞳が隠れていた。
ウィリアム王子は右の瞳が赤色。左の瞳が琥珀色。
反対に、アルド王子は右の瞳が琥珀色で、左の瞳が赤色だった。
不思議な色合いで、美しい瞳だと思った。
「ほら。どう？　お顔が、良く見えるのではない？　私の顔、見える？」
前髪を持ち上げると、アルド王子はびっくりしたように目を丸くした。
きょとんと私を見つめるアルド王子が続けて口にした言葉は――
「ミレイユの、おかお、みえる……」
それに、私は笑いかける。
「こうすれば、お顔がよく見えるでしょう？　どうかしら」

尋ねると、アルド王子は恐る恐る頷いた。
「ウィルのおかおも……みえるかな？」
そういって、アルド王子はウィリアム王子を見つめる。
そして、それはそれはとても嬉しそうにはにかんだ。ううかわいい！！
私は満面の笑みでアルド王子に言う。
「もちろん！　お花や草だって、良く見えるようになるわ」
アルド王子は、私が手に持った鋏を見てこくり、と確かに頷いた。
「じゃあ、ミレイユ……おねがい」
「ええ、任せて。とびきり素敵にしてあげる！」
そう言って、私はザンバラの髪にゆっくりと刃を入れていく。
チョキチョキ、とゆっくりと刃を滑らせて切り揃えてから、私はカレンに言った。
「ほら……こうすれば、とっても素敵。世界が広く見えるでしょう？　カレン、手鏡を持ってきて？」
すぐにカレンが手鏡を持ってきてくれて、私は手鏡を受け取った。
それをアルド王子に持たせて、切ったばかりの前髪を見せる。長い前髪が取っ払われて、新鮮なのだろう。アルド王子が歓声を上げる。
私たちのやり取りを見ていたウィリアム王子が、ウズウズとしたように私を見てくる。

それにくすくすと笑って、私はウィリアム王子に言った。
「ふふ、ウィリアム王子もこちらにいらっしゃい？　髪を整えましょう？」
大人しく背を向けたウィリアム王子の髪を櫛ですいて、私はゆっくりと鋏を入れていく。綺麗な金色の髪が刃で裁たれて、はらはらと落ちていく。
長さを揃えるくらいに整えて、最後に、私はカレンに用意させたもうひとつの品――桃色のリボンを手に取ると、それで彼の長い髪を結んであげた。
「はい、完成！　どうかしら？　私と同じ髪色のリボンなのだけど。……お揃いね？」
私は、自身の桃色の髪の毛先をつまんで、ウィリアム王子に見せた。
ウィリアム王子は、呆然と手鏡の中を覗き込んでいたけれど、やがてハッとしたように私を見る。
それから、慌てたように自身の背に手を回して、ひとまとめにされた髪に触れた。
「……」
それから、呆然としたように固まってしまう。
（あ、あら？　反応が芳しく、ない？）
もしかして、気に入らなかった……？
私はプロの理容師ではないし、ひとの髪を切ったのもこれが初めてだ。
（そ、そんなに個性的な髪型ではないと思う、のだけど……！）
一本でまとめるのは嫌だった？　それともピンクのリボンが嫌？

兎にも角にも、お客様のご意見を窺ってみなければ！
「どうでしょう、お客様。気になるところとか――」
「いいの？」
私とウィリアム王子の言葉は、見事にかぶった。
「え？」
目を瞬く私に、ウィリアム王子はさらに言う。
「いいの？　これ、もらって」
私を見るウィリアム王子の目はキラキラとしていた。まるで、宝物を見つけたかのよう。
「……」
それに唖然としたのは私だ。
だけどすぐに我に返って、慌てて頷いた。
「え、ええ！　もちろん。それはもう、あなたのものだもの」
そう答えると、ウィリアム王子の顔に喜色がじわじわと広がった。むずがるように、くすぐったげに口元がむにゅむにゅと動き、破顔した。
「ありがとう！　ミレイユ！　ぼく……これ、たいせつにするね！」
ぎゅう、とリボンを後ろ手に両手で掴んでウィリアム王子が笑顔を浮かべる。
その顔に、私はホッと胸をなでおろした。

（良かった……喜んでくれて）

その後、髪の毛を整えた双子は牛乳をごくごく飲んだ。牛乳は成長に良いと聞くし、これから成長期を迎えるだろうふたりにはたくさん飲んでほしい。

（牛乳が苦手じゃなくてよかったわ）

一気に飲み干したウィリアム王子のコップに、アメリアが微笑ましそうにお代わりを注いだ。その時だった。脈絡なく、アルド王子が言った。

「ぼくたちは……ふぎのこ、なんだって」

私が息を呑むと同時。強張った声でウィリアム王子がアルド王子を呼んだ。

「アルドッ……！」

「ふぎのこ……不義の子？　ですか？」

できるだけ、優しい声を心掛ける。

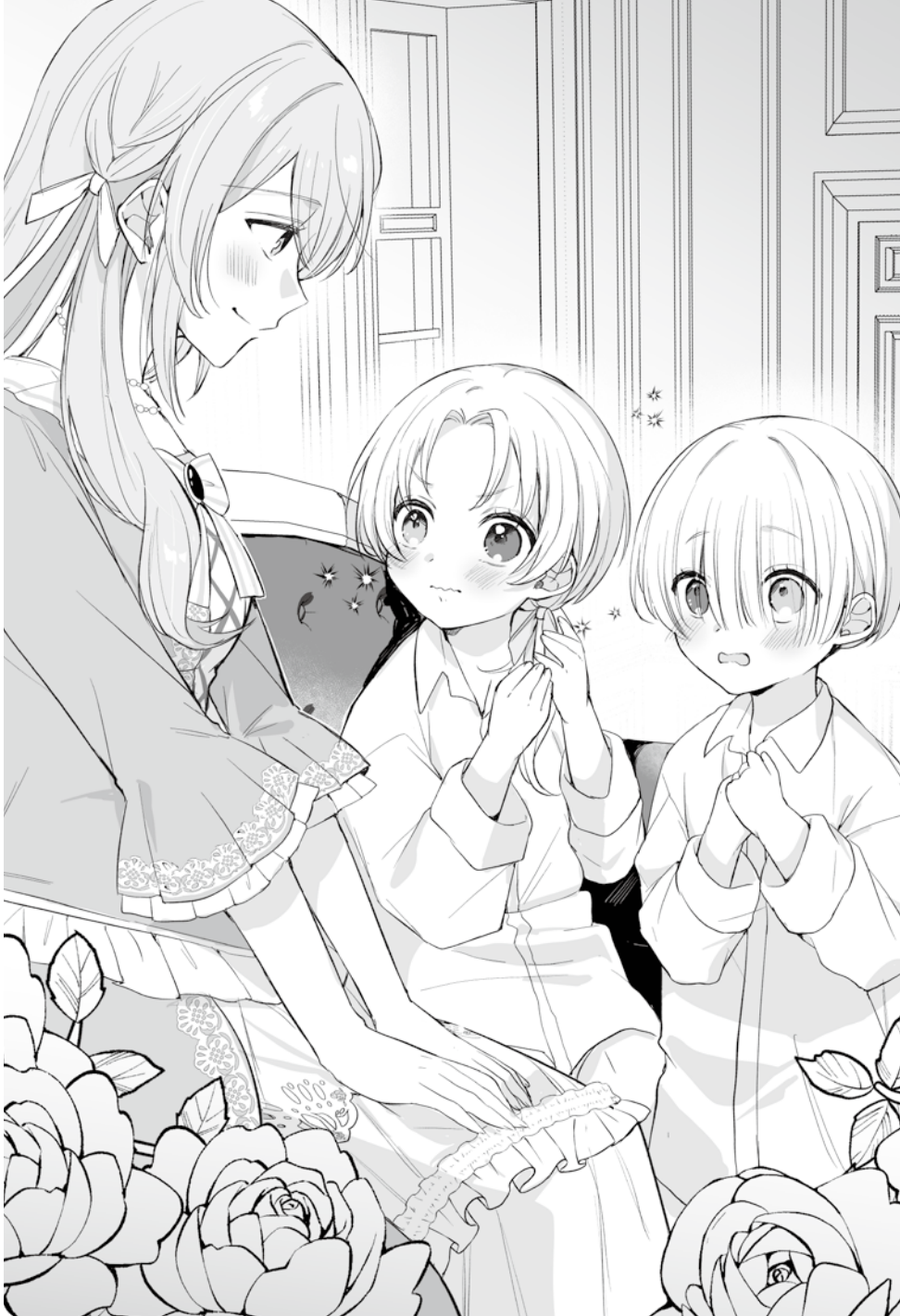
アルド王子は深く俯いていた。だけど、前髪を切ったから、その瞳はよく見える。彼の瞳は思い悩むように沈んでいた。

先程の発言も、意図したものではなくうっかり零れて出てしまったようだった。

だけど、話すと決めたのだろう。

……いえ、口にして初めて、話したくなったのかもしれない。

アルド王子はたどたどしくゆっくりと話していく。



「おかあさまはゆくえしらずで……ほかのおとことのこだから、にげたんだろうって。ねえ、ミレイユ。ふぎのこ、ってなに？　だからぼくたちは、おとうしゃ……おとうしゃ、おとうしゃ、まに、きらわれてるの？」

何回も言い直そうとして。だけどどうしても【お父様】が【おとうしゃま】になってしまったアルド王子を見て、私は思わず手を強く握ってしまった。

「……」

私に、何ができるだろう？

どうすれば私は、この子達を――

（何の憂いもなく、笑わせてあげられるだろう……）

何歳かは分からない。だけど、まだ相当に幼いはずだ。

前世で言うなら、幼稚園生？

そんな幼い子が、懸命に大人の言葉を理解しようとしているのだ。胸が酷く苦しく、痛かった。

私は喘ぐように口を開いて、言葉を探した。

だけど零れ落ちたのはその場しのぎの言葉だけ。

「……お母様は行方知らずなのですね。ですが、お母様はきっと、あなたたちを愛していたと思います」

「ミレイユ様……」

カレンが戸惑ったように私を見る。分かっている。まだ、裏取りをしていない。

それにこの言葉は上辺のもので、根本的な解決には至っていない。

彼らがなぜ、こんなところで孤児のような生活をしていたかも不明だ。

だけど、せめて、母の愛はあったのだと思って欲しかったし、私自身もそう、思いたかった。

☆

牛乳を飲んだ後、双子王子は揃って眠りについてしまった。

突然の来訪者、つまり私たちの存在に気を張っていたのだろう。

「寝室……は使えそうなのかしら？」

濃いめの紅茶を口にしながら、私はカレンに尋ねた。

「先程、ベッドを運び込みました。王子殿下がたは、そちらに運び込みます」

私が双子王子の髪を整えてやっている間に、寝室を調えてくれたようだ。

さすが、ミューテンバルトの暗部は優秀だ。

電源が落ちたように眠ってしまったアルド王子とウィリアム王子を、カレンがそれぞれ両腕に抱える。幼い子供とはいえ、女性が抱えるには重いだろう。

でも、カレンならば安心して任せることができる。

彼女は、アメリアの弟。今はカレンと名乗っているけれど、私が与えた名はカルロス。
そう、男なのだ。
アメリアが侍女として私に付いてくると決まった時、彼もまた、私の侍女になることを望んだ。
カレン――カルロスは、アメリアと一卵性の双子で、顔立ちがよく似ている。背格好も似ているので装いを変えれば、アメリアと瓜二つ。男にはまったく見えなかったのだ。
親に捨てられ、スリをして暮らすようになった彼らと出会ったのは、激しい雨の日。
私の侍従から財布を盗もうとし、捕らえられたのがきっかけだった。ふたりはその赤い瞳が理由で街のひとに忌避されており、犯罪行為をするしか生き延びる道がなかったのだという。
本来は警備兵に差し出して罰せられるところだった彼らを、私は連れ帰った。彼らの瞳が、あまりに綺麗だったからだ。
泥棒を自分の邸に連れ帰ったことで、しばらく私は怒られる羽目になったけれど。
そんな懐かしい思い出を振り返っていると、調査に出ていたアメリアが帰ってきた。
それと同時にカレンも寝室から戻ってくる。
「ふたりとも、お疲れ様」
「いえ、とんでもございません」
はにかんで答えてから、アメリアはすっと表情を消した。
真剣な表情で再び口を開く。

「ご報告いたします。ウィリアム王子ならびにアルド王子は、確かに陛下のお子として記録されておりました。ですが――」
ある予想が脳裏をかすめて、彼女の言葉を引き継ぐように言う。
「公的書類には、載っていない？」
「……はい。公的書類からは、彼らの存在は完全に抹消されていました。……中央教会の神官長のみが立ち入りを許される、禁書室にのみ、王子殿下の存在を記す書類がございました。こちらです」
アメリアが一枚の書類を差し出してきた。
その書類に目を通す前に、私は彼女に尋ねた。
「この書類には、ユニークスキルはかけられていなかったの？」
それだけで、彼女は私が何を聞きたいか察したのだろう。
「もちろんかけられていました。なのでこちらは、原本です」
「思い切ったことをしたわね……写しを用意したの？」
私がこう尋ねたのには、もちろん理由がある。
それは、アメリアのユニークスキルが【複製】だからだ。
その力は、ユニークスキルがかけられていない無機物に対してのみ、効力を発揮する。
しかし、重要書類には必ず【保護】のユニークスキルがかけられている。

だから彼女が【複製】の力で同じものを用意することはできないだろうと考えたのだが、その通りだったらしい。

「ミューテンバルトの暗部のものには、【模倣】のユニークスキルを持つものがおります。今回は彼を同行させました」

【模倣】のユニークスキルはその通り、見たものをそっくりそのまま書き写す能力だ。書き写すのは手作業なので、その分、時間が必要になる。とてもリスキーな仕事だったに違いない。

「短い時間だったのに、流石ね。……あなたを連れてきてよかったわ」

「光栄です」

（相変わらず、ミューテンバルトのユニークスキルは多彩ね……）

私はアメリアから受け取った書類にサッと目を通した。

確かにそこには、ウィリアムとアルド、両名の名が記されていた。母親の欄には――メイヤナルワナと書かれている。馴染みのない名前なので、他国の人間だろう。

書類には、こうも記されていた。

【備考：双子の瞳は、禍つ瞳。災いを呼び寄せる瞳のため、その存在は抹消と致す――】

「なに、これ……そんな理由で……」

「……ミレイユ様は、この国の人間の、瞳の色に対する認識をご存知のはず。赤の瞳は、獣の目として恐れられ、虐げられます。そして色違いの瞳は、禍つ瞳――災いを呼ぶ瞳と言われています」

「だけど、二人が王の子なのは確かなのよ!?　それなのに、存在までも消し去るなんて」

「王子殿下の母は、彼らを産んでから行方知らずとなっております。それもあって、おふたりは王の子ではないと言われているようですね。……王の色彩を継がなかったこともその一因でしょう」

「くだらない」

思わず、唾棄するように言ってしまう。

ただの迷信に振り回される人々も、目の前の命をなかったことにする人々も。

……双子はたしかに、ここにいて、生きているのに。

「だけどこれで裏取りができたわ。……わたくしは、王妃として王子たちの復権を求めます」

「それは……」

アメリアが難しい顔をする。カレンも、黙って眉を下げている。

分かっている。私の言っていることは、そう簡単なものではない。

王が抹消した存在である王子の復権は、難儀するはずだ。

だけど諦めるつもりはない。元より大人としてふたりを保護することはすでに決意していたけれど、ミューテンバルクの人間として、王妃として、どこまで介入するかは決めかねていた。

でも、アメリアの報告を受けて、その迷いは消え去ったのだ。

「だって、理不尽じゃない！　私は……！　あの子たちを見て、このままにしておいていいとは思えない。ううん、違うわ。このままにしておきたくないの」

私たちがここを訪ねた時、ウィリアム王子は一番に私たちに向かってきた。
幼い王子は、この場を奪われんとするために、アルド王子を守るために、大人のアメリアに立ち向かったのだ。勝率は低いと、きっと分かっていた。幼い子でも、それは確実に。
……その気持ちを想像すると、苦しかった。
だって、ふたりは本来、何もせずとも守られるべき年齢なのだから。
王子という地位が、彼等を守ることに繋がるのならば、私はそれを与えたい。そもそも王位継承権を持つ正式な存在がいるにも関わらず、理不尽な理由でないものとする方がおかしいのだ。
だけどそうは言っても、すぐに解決できる話ではない。
追加の調査も必要だ。根回しも。私が動く必要だってある。
まず、今の私にできることといったら――
「そうだわ。お父様への定期報告がまだだったわね」
私は思い出した。この手の相談事に最適なひとの存在を。
それに、ミューテンバルトとしても『王の子』をどう扱うか議論する必要がある。
……とはいえ、お父様の判断は分かりきっているけれど。
なにより、お父様には子育て経験がある。私が生まれ育ったのだから当然だ。
母は、私が生まれてすぐに亡くなっている。男手ひとり、とはいっても使用人や乳母もいたけれど。それでもここまで私を育ててくれたのはお父様だ。

「ひとつ伝言を頼めるかしら？」
私の言葉にアメリアとカレンは目を瞬いた。
「あのね。――……」
私の伝言、もとい相談事項を聞いて二人はふっと微笑んだ。
アメリアが楽し気に口を開く。
「承知いたしました。きっと閣下は、驚かれますわね」
「そうね。でも、お父様は誰よりご存知のはずだわ。何より私は――お父様をよく困らせていたようだもの」

★

その頃――アルヴェニア王国の国王ウルジュは、側近の男の訪れに、寝台から体を起こした。
後宮には、王の好む女がごまんといる。その内の、特にお気に入りの女の元にいたウルジュは、無骨な側近の声に興(きょう)を削がれたのだろう。機嫌を損ねて天蓋(てんがい)カーテンを開けた。
「何用か」
「王妃陛下が、王子殿下たちに出会われました。ミューテンバルトに知られたのは手痛い。やはり、存在ごと消すべきだったのでは――」

「それくらい構わぬ。それよりも、余の許しもなく部屋を訪ねるなど言語道断。切ってやろうか」
ウルジュが壁に立てかけてあった剣に手をかけると、側近の男が息を呑む。
「も、申し訳ございませ――」
「アレらを生かしているのには意味がある。……ジュリアスは、アレらの存在を知っているのだ。アレらを亡き者にすれば途端、『王位継承者を殺した王』とやつらは謀反を企てるだろう。ジュリアスを王にと考える不届き者らが血気付く。少なくとも、ジュリアスを始末するまでは、アレらは生かしておかねばならん」
「ジュリアス王弟殿下……でございますか」
ピタリと刃先を首元に押し当てられ、上擦った声で側近の男が答える。
「そうよ。余に殺されかけ、大慌てでこの国を出た情けない愚弟よ。あやつは来月、帰国するらしい。その時に、余はジュリアスと共に、禍つ瞳の双子を亡き者にしよう。担ぎあげる者がいなくなれば、みな、諦めるであろう。余を排し新たな王を、などという不遜な考えを抱かなくなるはずよ」
「――……は」
「分かれば、さっさと去れ。余の不興を、これ以上買いたくなければな」
ヒタヒタと、刃先が首筋に当たる。
側近の男は、ギ、と歯を食いしばると、深く頭を下げ答えた。

「御意」

側近の男は扉を閉め、愛人の部屋を後にすると、短く舌打ちをした。周りには誰もいない。
（今から四年前、ジュリアス王弟殿下が御年十四の時）
ジュリアス王弟殿下こそ、真の王に相応しいと動き出す貴族の動きを聞き付けて、王は彼の暗殺を命じた。
幸い、ジュリアス王弟殿下は剣術に秀でていたため命を落とすことはなかったが、あまりにも連日命を狙われるので、情勢が安定するまではと他国への留学を決めたのだ。
国を渡ったとなれば、さしもの王も手は出せないと考えてのことだった。
その王弟殿下が、来月帰国する――
その時を持って、王は双子の王子もろとも始末する、と言った。
側近の男は、呻いた。
長く王に仕えてきたが、もはやここまでか、と。

★

男ものの服に袖を通すのは、何か月ぶりだ？

そう思いながら、僕はさっさと着替えを済ませ、部屋を出た。
廊下の壁に背を預けて立っていた、姉のアメリア。
「それじゃあ、頼んだわよ。下見はミューテンバルトの兵隊が済ませているけど、目を光らせてきて。注意は怠らないで」
「分かってる。姉さん」
先日、ミレイユ様は、ミューテンバルトの旦那様に伝言するようアメリアに命じられた。
伝えに走ったのは姉のアメリア。旦那様はその場でお返事をしたためられて、姉はそれを手に戻ってきた。ミレイユ様は手紙に目を通されると、今度は別の指令を僕に出された。
それが、今から僕が街に繰り出す用件だ。
この格好――つまり、男ものの服を着て出かけるのは、何か月ぶりだろうか。諜報活動や、下見の時なんかには、結構重宝している。
（市井は……普段と変わりないな）
ミレイユ様が外出される日は平日なので、今日と似たような状況だろう。
その日は、催事もないので、ひとでごった返すということもないはず。
目的地は、王都の外れにある一軒家。
事前に手紙を出しておいたので、目当ての店に顔を出すと、すぐに僕は店内へと通された。

立ち読みサンプルはここまで

「久しぶりだな、ローラン。変わりはないか？」
ローラン――ミューテンバルトお抱えの職人だ。
柔和そうな顔に、黒ぶちの眼鏡をかけている。
彼も、僕ら同様に訳ありの出生で、それを旦那様に拾われたきと聞く。ミューテンバルトに仕える人間は大なり小なり、その身に秘密を抱えている。
例えば――もとは高貴な身の上だったが、追われる立場となった人間だとか。裏取引で売買予定だった、希少な見た目やユニークスキル所持の人間だとか。罪を犯して処刑予定だった人間とか。
経緯は様々だ。
僕とアメリアだって、ミレイユ様に拾われなければ、あのまま処分を待つ身だった。このローランも同様で、詳しく聞いたことはないが、何かしら後ろ暗い過去があるのだろうと踏んでいる。
「久しぶりだね、カルロス。こちらは恙なく。普段と変わりない」
「そうか」
「お嬢様は元気かい？」
尋ねられて、僕は頷いて答えた。
「お元気だ。邸にいた時より楽しそうだよ」
「それは何より。旦那様もお嬢様のことは、めっぽう気にされていてね。私はお嬢様とお会いするのはとても久しぶりなんだ。楽しみだよ」